

北杜市子ども読書活動推進計画策定委員会会議録

- 1 会議名：令和6年度第2回北杜市子ども読書活動推進計画策定委員会
- 2 開催日時：令和6年8月22日（木）午後2時～午後4時10分
- 3 開催場所：北杜市金田一春彦記念図書館 SVホール
- 4 出席者（敬称略）
 - (1) 委員
河手由美香、小澤志保子、佐野隆、谷戸直子、白砂卓巳、渡部一司、齋藤園子、菊見理恵、前田久美、津金胤寛、鷹左右紀（欠席委員：鈴木伸幸、小宮山典子）
 - (2) 事務局
中央図書館長/中澤徹也、中央図書館総務担当/河野明美、大塚美智子
- 5 会議録署名委員（敬称略）
谷戸直子、白砂卓巳
- 6 公開・非公開の別：公開
- 7 傍聴人の数 0名
- 8 会議内容
 1. 開会
 2. 会長あいさつ
 3. 議事
 - (1) 「北杜市子ども読書活動推進計画（第四次）」の内容検討について
 - (2) その他
 4. 閉会

議事（1） 「北杜市子ども読書活動推進計画（第四次）」の内容検討について

事務局：資料「第四次北杜市子ども読書活動推進計画」により説明。

●質疑応答等

議長：事務局の説明について、第1章第四次計画策定の背景について、意見や質問等があればお願いしたい。

委員：第1章1（4）本市の読書活動の動きについて、内容を増やしたいとのことだが、第2章の第三次計画の取り組みの成果などについて、概要を入れておけばボリュームが増え、分かり易いと思う。

- 議長：事務局でこの提案を参考にいただければと思う。
- 続いて、第2章第三次計画における取組・成果及び課題について、事務局の説明に対する質問、意見等があればお願いしたい。
- 委員：9ページの⑤本を読むことが好きな児童・生徒の割合が減っていることの原因について、何か分析はしているか。
- 事務局：令和5年度末に行ったアンケートの結果を記載している。具体的にどうして減少したのかという検証はしていない。どちらとも言えないと回答した児童生徒が、平成29年度に比べ、令和5年度末で実施した割合がだいぶ多くなっている。好きまたは嫌いという設問にしていたら、もう少しはっきりした結果が出たかもしれない。好きでもなく嫌いでもない、どちらとも言えないという選択肢を入れたことで、どちらとも言えないという回答に流れてしまった児童生徒が多かったことは、アンケートから見て取れる。どうして好きな生徒が減ってしまったかというところは、今のところは検証していない。
- 事務局：補足になるが、コロナの影響も若干出ている。コロナによって、この読書活動推進計画が停滞してしまったところがある。図書館の利用状況も、最近徐々に戻ってきてはいるが、100%戻ってはいない。その背景としては、社会情勢の変化やデジタル化の進展ということもあり、取り組みとしては難しい。どのようにしたら、この好きではないが好きになるのか、どちらとも言えないがはっきりするのか、非常に悩ましいところである。
- 議長：実際に学校の方で担当していて、何か思い当たるところがあれば伝えてほしい。
- 委員：2つ思い当たることがある。1つはYouTubeなどのいろいろなコンテンツが増えてきていること。また、学年が上がるにつれて厚い本を読むように促す先生の声かけが増えてくるため、それを受けて読める子と読めない子が出てくる。読む子と読まない子の差は、学年が上がるにつれて広がっていくため、自分は読めないと思っていると、このようなアンケートで好きか嫌いかの問いには、嫌いを選択すると思われる。
- 委員：中学生は、忙しい中でもSNSやYouTubeなどで情報を見ている。以前は本を読んでいた時間に、このような視聴する時間が入ってきているため、どちらかというとなら SNS や YouTube を優先しているので、本が嫌いではないけれど、触れる機会が減っていることが、図書館に行くことが減ったということと連動していると思うし、趣味の分野が細分化されているような趣味になっていると思う。
- 委員：本校の状況も、1年生、2年生、3年生と、だんだん本を読むことが少なくなっていることもあり、スマホの所持率が高くなれば、自分の趣味が動画などの動いているものになってしまうことが大きな原因かと思っている。特にYouTubeは大きな存在だと思う。1日24時間の中で子供たちが何をするのかというところ、ゲームとYouTubeを見ることに時間をかけ、本を読むことが嫌いではないが、動画の方に興味がいってしまうことがあるので、どちらとも言えないが増えてしまうと考える。
- 議長：学校現場の声によると、YouTube動画をはじめとしたコンテンツの出現、スマホなどのデジタル技術を使うことの中で本を読む体験が減っていることも含めて、背景に書き加えていただくことができればよい。
- 委員：本を読むことが好きな児童の割合は低学年で82.3%、小学校高学年では68.8%となってい

るが、小学校という表記はいらなと思う。

事務局：取り組みや貸し出しという表記も多く使われているが、最終確認をするので、今回は内容に触れてほしい。

議長：前回は、アンケートを取っていく時には変化率を発達段階によって見ていくことが大事だという意見が出されていた。県の計画も発達段階によって細分化されているため検討してほしい。

委員：同じページに、保護者や子どもを取り巻く大人が読書に目を向け、読書の楽しさを体験でき、生活の一部として定着していけるような取り組みとあるが、先ほど YouTube などのコンテンツがたくさんあり、なかなか読書をする時間がないという話があった。我が子も同様で、いつまでも YouTube を見ているが、保護者の立場からすると、夏休みの宿題には読書感想文がある。しかし今の時代は自ら本読むのは特定の子しかいないと思う。ある程度家庭で読書の時間を決めて環境作りをしていくことが、生活の一部として読書が定着していくのではないかと。

議長：事務局、今の意見に対していかがか。

事務局：このような家庭が増えていくことを望んでいる。子どもは家庭で楽しい読書経験を1度味わうと、また読みたいと思うようになる。夏休み中は、北杜市内各小中学校では、ほぼ100%家読に取り組んでおり、家族と同じ本を読んで感想を書き合い、本に対しての会話が生まれるような取り組みを行っている。これを良い機会だと捉え、宿題だから取り組むだけでなく、自然に家庭に取り入れ、継続していくと定着するのではと考える。

議長：家読の項目、家庭での取り組みという項目に、出された意見を盛り込んでいただく工夫を考えるとよい。

委員：9ページで、中学校は令和5年度の結果が58%で22ポイント減となっている。引き算だと思うが、単純に人数は何人か。

事務局：中学生で、本を読むことが好きではない生徒は、936人中111人。

委員：パーセンテージで出すと母数によって比較が難しい。具体的に数の方がいいと思う。

議長：資料の提示の仕方について、子どもの母数が少なくなっている関係で、子どもの実数を示した方が、割合で示すよりも実態が強く伝わるのではないかと意見についていかがか。

委員：子供の数が相当減っている中で、母数が少ないと1人2人変わっただけで変動が大きい。ブックスタートで配布した本の読書率も、おそらく母数は少ないため、1人2人で大きく変わる。やはりパーセントで比較すると変動が大きくなると思う。

事務局：ブックスタートで配布した本の読書率も、1人読んでいないと答えるだけでこのような数字になってしまう。

委員：データの示し方の基本的な考え方として、パーセントでもいいが、全体の母数だけは必ず入れておいた方がよい。もう1点は、国の第5次基本計画に示されたデータを見ると、小学校、中学校ともに本を読むことが好きな児童生徒の数の逆数を100から引いた残りの数が不読率という理解でいいのか。それとも、どちらとも言えないが入っているので、国が示してるデータは、好きではない、嫌いだとはっきり答えている子どもたちだけを不読率としているのか、その違いを確認して、データの作り方を工夫した方がいいと思う。また、

先ほどの委員からの質問で、原因について調べてみたところ、令和に入ってから子どもがスマホを持つ普及率が急激に上昇している。特に国レベルでのデータでは、令和3年頃から、中学生の不読率が2倍近くに上がっている。これは、おそらくスマホの影響だろうと思う。ところが、平成12、3年くらいからのロングスパンのデータを見ると、平成13年から14年にかけて、急激に不読率が変化している。意外にも、ゆとり教育が始まってから、不読率がぐっと下がっている。本を読む余裕ができたのかもしれない。一方で、日本でYouTubeの日本語版ができたのが2007年。2022年頃からオンラインゲーム、パソコンゲームなどの普及が進んでいくが、その間の影響はあまりないようだ。不読率の背景もしっかり把握して考えていかなければ、これから策定する計画が効果を生むのか生まないのか、そこに大きく関わってくると思う。

議長：データの示し方については、母数の提示ということで検討してほしい。不読率の変化についての検証は、事務局が今後示していく上で、何か考えがあるか。

事務局：1ヶ月の間に本を1冊も読まない児童生徒の割合として出ているのが不読率で、好きか嫌いかではなく、自分が1ヶ月の間に本を読んだか読まないかで、そこで0と答えた児童生徒が不読率の1冊も本を読まないとしてカウントされてくると思う。北杜市図書館で令和5年度に行ったアンケートは、1ヶ月という同じスパンで取ればよかったが、1週間でのくらい本を読みましたかという設問になっているため、ここと比べることはできないという現状がある。その中で読んでいないと答えた、先週1週間本を1冊も読まないと答えた児童生徒の数は拾える。1か月とは比べられないが、ここでは1週間と区切ってしまったため、第四次では同じように合わせていいか。先月1ヶ月としていくのが比較しやすいと思う。

議長：今後のアンケートの取り方等を事務局で工夫し、委員の意見を反映しながら記載の仕方についても検討していただきたい。

委員：アンケートを行い、そのアンケートに対するパーセンテージなど出す時には、どんな質問をしたのかということを書かないとわからない。教育委員会ではこのような質問に対してこのように回答がありましたというものを出しているもので、できればそういうやり方のほうが見る人にも分かり易いし、理解を得やすいと思う。

議長：資料の示し方で、アンケートの質問項目を具体的に記載するなど、資料の示し方全般にわたって検討をお願いしたい。

事務局：示し方については、別紙資料としてアンケートのまとめをつける構成でいくことを第5章の最後に記載した。参考資料としてアンケート結果を載せる予定でいるが、そこにはアンケート項目も全て入れて、第三次と比較できるものは比較しながら提示していこうと考えているが、本体の中に入れるものもそのようにした方が分かりやすいという確認でよいか。

委員：まとめた方が親切だと思う。別で用意するのであれば、どこかに別紙 資料参照と書いた方がよい。

議長：資料を端的に分かりやすくということで、できればアンケートの質問項目も入れていくような形で検討していただきたい。

委員：10ページで、月1回以上市立図書館を利用するという割合の数値が書いてあるが、本文と表の数値が違っている。

事務局：表のデータが正しいので、データに合わせて文言を修正する。

委員：同じ10ページの最後の部分で、市立図書館を利用する児童生徒の割合。その説明書きの中に、小学生は1人で行けないから、忙しいからとあり、そういった子供の現状を踏まえ、小中高生のニーズに合わせた図書館のあり方を考えていくことが必要と結んでいる。これはその通りだと思う。ただでさえ忙しいとか、1人で行けない子供たちに、ニーズに合わせて図書館のあり方を考えるという、これは学校図書館を充実させるしかないのではないか。1人で来ることが出来ない子どもに、市立図書館に来てということは無理だと思う。ここはもう少し学校図書館を充実するという踏み込んだ表現ができないものかという感想。また、学校図書館の利用は、授業の中で利用したり、子どもたちが自発的、自主的に利用したり、いろいろな形態があるので、学校図書館の利用率を聞くということは難しいのかもしれないが、そういうデータも役に立つと感じた。

議長：1点目の、学校図書館の充実にまで内容を踏み込んで書くことができるかということについてはいかがか。

事務局：6番については、市立図書館の利用で、学校の利用率までここに入れるとなると、学校の方とよく協議をした方がいいと思う。図書館の利用率をどうやってあげていくか、来ることが困難な子どもたちの親を説得するのか、図書館を使うための方策を考えていくことになるので、学校のことを若干触れるのは有りだとは思いますが、そこはまた学校の方ともよく相談をしながら考えていきたい。

別な箇所で、子どもの読書活動の推進の要になるのが図書館だという表現があった。役所的には、学校と市立図書館は立場が違う。あんまり踏み込んだことができないかもしれないが、連携は必要だ。その辺りが感じられればいいのではないか。

議長：もう1点、学校図書館の利用率の調査について何か具体的な方策があるかということだが中学校ではいかがか。

委員：利用率について、学習で図書館にきた時は、キャリア学習や職業の本など、生徒はいろいろな本を利用する。利用している時は貸し出しをしないと数値としては残らない。貸し出し冊数は、登録している生徒が何冊読んだのか、個人記録からは公共図書館と同じように全て出すことができる。ただ閲覧したものに関しては、教室に持っていき、生徒が授業中に読んだ分などは、どのように利用したのかわからないため、わかる面と曖昧な面がある。

議長：小学校ではいかがか。

委員：貸出冊数はシステムで抽出することができるが、具体的に学校図書館で先生方がどのような利用をしたのかは、利用があったことを独自の記録として残していた年があった。そういう記録があると、さらに充実させていく必要があることが具体的にわかると思うが、それを学校司書の仕事としてすべての学校司書が毎年できるかと聞かれると、この場では回答が難しい。

議長：貸出冊数、または授業での利用回数が、可能な範囲での図書館の利用率の出し方であるようだが、市と学校で連携しながら、今後の計画を策定していく上でどのようなアンケート項目で利用率が図れるのかを検討していただければと思う。また、学校図書館の充実についての内容の踏み込みは、ここでは市立図書館ということなので、今回は内容の記載まで

は大きく踏み込めないが、別のところで学校図書館を利用していくことの記述を充実していただければありがたい。

委員：学校図書館の利用で気になったのは不読率。市立図書館が行っているアンケートの結果と学校でのデータを付き合わせて矛盾がなければ、それは本を読む子どもが減ってきたなどの傾向を正確に把握できるのではないか。この子どもの読書推進活動は、市立図書館の利用率を高めることではなく、子どもに本を読んでもほしいというのが最終目標だと思う。使えるデータは使い、子どもの現状を把握することが大事だと思う。

議長：事務局も学校と市立図書館の連携が必要であると示している。引き続き市と学校が連携して、市全体で子どもの読書の不読率を減らしていくことが明確になるような計画や、記載の検討をお願いする。

委員：表記の仕方、児童生徒と言いながら、小学校、中学校、高等学校など、または小学、中、高校生などいろいろな言葉が出てくる。小学生が児童なので、児童というと小学生という表現になるのか。中学生は生徒、高校生も生徒だが、表現を統一した方がいいと思う。

議長：次回までに文言の統一を図ってほしい。

委員：保育園に関する内容について、異年齢交流の機会や場の確保が課題とあるが、具体的方策の中で、異年齢の読み聞かせという文言はなかった気がする。取り組みに難しい部分があるのか。

委員：保育園内の異年齢の読み聞かせと思っていた。今まで、小学生や中学校の生徒に来てもらい読み聞かせをしてもらったという経験はない。他の保育園で行っているという話も聞いたことはない。中学生が家庭科の授業や職場体験で保育園に来た時に、園児と遊んだ中で読んでくれるということはある。

委員：小学校との交流は0ではない気がする。本校でも小学生との交流の遊びの中で、絵本を読み聞かせることはある。

委員：家庭科の保育の授業で、保育園へ行って子どもたちと触れ合うという授業がある。この中で、中学生が保育園で体験できた授業の中でも、読み聞かせを実施してどうだったのかということも大事な体験になるのではないか。このような連携も必要なのではないか。

議長：異年齢交流による読み聞かせを、小中学校で実際に職場体験や授業の一環で行っていても、保育園の方でそれを読み聞かせと認識をしないでカウントされていないこともある。それをカウントするのかもしれないかという問題もある。このことで子供たちがどのような振り返りをするかによって、また新たな活動も生まれてくるということもあるが、その扱いについては事務局の方で検討してほしい。

事務局：今の議論で今後の参考のために確認する。須玉では保育園と連携しているが、他の学校でも連携して行われているのか。これを入れることで子どもの読書活動の推進にどのくらい効果があるのかが見られなかったため、第四次計画の中には入れていない。しかし、小学校は無理でも、中学生や高校生が保育園での読み聞かせをすることにより効果はあると思うので、計画に入れた方がいいということであれば、意見ををお願いしたい。

委員：こども保育課の方から保育士不足ということを知っている。保育士を目指す生徒が増えるように、教育委員会から各学校へ職場体験を促すよう話してほしいとのこと。おそらく全

部の中学校に、保育士を目指そうとする生徒が増えるようなお願いをしていると思うので、このような連携はできるのではないかと思います。

議長：保育士不足の背景もあり、読み聞かせの現場はあるということ。子ども同士の振り返り、子どもによる取り組みの1つとし、これを活動として何か発展させることができるかどうか事務局の方で検討していただきたい。

委員：子どもの読書推進について、子ども自身はどう考えるのか。子どもなりの考えもあるような気がする。そういう子どもたちの考えを出してもらい取り組みがあってもいいのではないか。

議長：第三次計画では、具体的な方策の中に異年齢交流、小中高生による読み聞かせと書いてある。園の中での異年齢交流と勘違いすることもあるので、小中高生による読み聞かせ等、はっきり明記したほうが良い。子ども主体の計画ということが委員からの指摘のとおり柱として必要かと思う。その意味でもこの観点は子どもたちによる読み聞かせということで重要で、三次計画の記載にもあるため、これを踏まえて事務局の方で整えていただきたい。続いて第3章の第四次計画の基本的な考え方について、意見、質問はあるか。

委員：行政による子どもの読書活動の推進で、関連行政機関として今回から教育総務課を入れたということだが、教育総務課は基本的には事業をすることではないため、事業の推進となると、小学校、中学校に対して行っていることで良いのか。

事務局：委員からも意見が出たように、学校図書館の充実ということも入れた方がいいのではないかという考えから、関係部署である教育総務課を加えた。

議長：教育総務課では、学校図書館の充実等への支援という内容で記載をお願いしたい。

委員：26ページに学校における子どもの読書活動の推進とあり、どれも個別には重要な点だと思うが、これは誰が実施するのか。

事務局：学校におけることであるので、学校および学校図書館の方が主体となって行うこと。第三次計画から引き続き第四次計画案とした。

委員：ただでさえ教員の多忙な状況が問題視されている中で、これを担うとすると、学校司書が主に担うことになるのか。その場合、学校司書は全ての学校に配置されているのか。

事務局：配置率については、山梨県内は配置率が高く、北杜市立小中学校においても、学校司書は100%配置である。

委員：学校司書も忙しい中で対応できるのか。実際、取り組んでいるものが多いのか。

委員：図書館と連携をしながら、現実的には、ほぼ取り組んでいる。

委員：多様な子どもたちが読書の機会を得るための工夫とあるが、この多様という言葉の意味も多様で、障がいを持った子どもがいたり、外国籍の子どもがいたりするが、1番多様なのは、子どもたち個々の興味関心だと思う。それへの対応について具体的に学校ではどのようなことを行っているか。

委員：子どもの数が減っていることが、この場合はプラスに働いている。所属している小学校は、全校98名しかいないため、1年生が入学してきてもすぐに顔と名前が一致できるほどで、どの子がどんな本が好きなか把握しやすい。そのため、小規模校ならではの特徵で、その子に応じた本を個々に薦めたり、図書館に滅多に顔を出さない、またはあまり利用しな

い児童に対してもアプローチができる。

委員：中学校では、図書館に来ない生徒に対してのアプローチはなかなか難しいと感じている。この多種多様な図書に触れるための展示ということは、公共図書館の展示を参考にすることがある。その中で、戦争の絵画と一緒に戦争の本を廊下に展示をした。生徒はそこから1冊でも2冊でも興味を持ってくれるかもしれない。またスポーツが好きな生徒は、スポーツの展示をした時には興味を持ってくれると思うので、いろいろな本をテーマ展示することで興味を持ってもらえるような工夫をし、それが貸し出しに繋がるような試みをしている。

議長：多様な子どもたちが読書の機会を得るための工夫は、学校では司書を中心に具体的に取り組みがなされているため、第4章の具体的な方策に入れてもよいかと思われる。

委員：学校図書館の司書は、読まない子どもを作らないようにするにはどうしたらいいか工夫している。私もいろいろな学校図書館を見る機会があったが、掲示も含め、図書委員の子どもたちとの活動も、学校司書の研修等で意見交換をしたりして工夫をされていると思う。ぜひ推進してもらいたい。この具体的な方策の中で、特に子どもの意見を取り入れた学校図書館の運営、子ども目線でどう運営していけばいいのか、みんなが楽しく本に触れるにはどうしたらいいか、SNSやYouTubeから離れて読む時間を作るにはどうしたらいいのかということを考えていくこと、デジタル社会に対応した環境整備という新たに加わったことも考えていくことが大事なのではないかと思う。学校には学校司書と図書館主任もいるので、学校司書だけに頼るのではなく、主任を含めて学校全体で考えていく姿勢を作ることが大事。

議長：学校の方では、司書のみならず図書館主任をはじめ、司書教諭も配置されている関係で、学校全体でこれらの活動に取り組んでいただくこと。特に国や県でも重視しているデジタル系、子ども主体の活動、この辺に特に主眼を置いて記載をする工夫があればありがたい。

委員：市立図書館に来たことがない人がいると思うので、保育園や小学校において、みんなで図書館に行こうということが出来ないか。みんなで来る機会があれば、ルーパ的なことを教えながら本を紹介して、楽しさを知ることが出来て、子どもたちの興味のあるものが見つけられる可能性もあるのではないかと思う。学校関係は忙しいと思うが、その中で時間をつくることで図書館を知り、知ることによって来る人も増えるのではないかと思う。

議長：市の公共図書館の利用に向けて、学校や保育園と協力しながら利用率を上げていく、また利用の仕方を教えていくという意見。図書館のあるべき姿について、教育課程も大きく変わり、図書館の機能が学習センター、読書センター、情報センター、そして今、居場所ということが求められている。学習が共同的に意見を交わしながらというスタイルに変わっている中で、図書館のあるべき姿も、静かにマナーを守り、モラルを持ってという形だけでいいのかどうか。図書館のあるべき姿についても、子どもたちの居場所として考えていく上で、子どもの読書活動の中に何か記載することが可能かどうかということ、事務局で検討していただきたい。

委員：いくら本を読む体制を整えたとしても、やはり家庭での生活は非常に重要だろうと思う。ネウボラ推進課でも学校保健委員会に出席し、朝食の欠食問題や、睡眠時間の問題などの

話をするが、毎年、学校の方でテーマになるのがアウトメディアの使い方である。スマホが普及している中、子どもがスマホを見て睡眠時間が少なくなったり、大幅に自分の時間をスマホに取られている状況だと思う。その辺が変わっていかないと、本を読む子どもは少ないままなのではないか。このような中で、学校司書が養護教諭と連携し、家庭での生活について行う取り組みがあるのか。

委員：本校の養護教諭が、子どもの視力低下の研究をしていた際、それに関する絵本を養護教諭に紹介し、児童の図書館利用の時間に、養護教諭が説明した後、絵本を読み聞かせる取り組みを行った。

委員：私の所属している中学校では、養護教諭と図書館が一緒になって、読書の推進に直接つながるようなことは特にしていない。朝読書の時間を確保することや、家での読書であれば、長期休みの家読に学校全体で取り組んでいる。

事務局：この計画の中に、家庭でのことを盛り込んでいくのは難しい。家庭における読書や読み聞かせが大切だと皆が認識してる中で、保育園における読書活動の推進の中に、家庭における読み聞かせの推進を追加をさせていただきたいが、保育園独自で家庭に切り込んでいくのはなかなか難しいため、図書館との連携の中に入れ込み、家庭での推進にも力を入れて少しでも反映させていきたい。

議長：そのほか全体を通して意見を伺いたい。

委員：戦後、読書が国民共有の1つの財産になった時代があり、地方でも読書会や社会教育活動の中で盛んに行われた。昭和30年代にテレビが普及することで、それ以降不読率は、子どもだけでなく大人も含めて減少し続けていると思う。2000年代に入り、オンラインゲーム、YouTube、TikTok、SNS、スマホなど大きな流れに太刀打ちするのは相当大変。意識の高い親ばかりなら将来バラ色だが、子どもを横に置いて知らん顔してスマホを見ている母親をよく見かける。こうなると学校で読書を教える特殊教育をするしかないのではとも思う。この計画は行政の計画なので、ある程度相場的にならざるを得ないとは思いますが、その中でも、学校における活動を特に重点化するべきではないか。学校司書だけでは不可能であれば、市立図書館司書が支援に行くなど、限られた資源、時間を集中的に学校の読書教育に投下していく方法が有効だと思う。

また、最後の30ページ、31ページの数値目標を掲げるのは大変結構だと思う。この中で、本を読むことが好きな児童生徒の割合が最終目標の数値。他の部分はそこを達成するための手段なので、そこは書き分けた方が整理しやすいと思う。

委員：大人がテレビを見ていると、子どもはテレビの横でスマホをしているという姿がどの家庭でも多いのではないかと思う。テレビがあっても、本当に見たいテレビ番組を決めて、その後で本を読むなど、家庭の中で親が主体で本を読む姿を見せることが大事なのではないかと思う。

委員：不読率という話が出ているが、普段全く本を読まない子は、多分自分がどんな本に興味があるのかわからないと思う。以前、学校図書館の取り組みで読書ビンゴの企画があった。普段読まない子どもには、あなたの性格だったらこんな本が向いているなどの遊びを少し入れて、誘導するような企画があっても面白いと思う。

- 委員：異年齢交流で、中学生が職場体験の時に保育園で読み聞かせをしたということを伺い、小学生も図書委員が保育園に読み聞かせに行けたら楽しそうだったと思った。しかし移動など、現実的にはなかなか難しいと感じたが、職員会議で保育園と小学生をつなぐことを強化していきたいということも取り上げていたので、本を介して連携ができたらいと思う。
- 委員：様々な考えを聞く機会となりとても勉強になった。デジタル社会に対応した読書環境ということで、これからこのことについてもっと資料を読むなど学んでいきたいと思う。
- 委員：緊張しながらも勉強になった。図書館探検も、園児が図書館に遊びに行く機会があるが、やはり賑やかになってしまうと、あまり行かない方がいいのではという考えになってしまっていたため、小さい頃から図書館はこういう場所だよ、こんなたくさんいい本があるよということ覚えさせたり、一緒に楽しめたらいいなと思う。保護者の方でも、スマホに子守りをさせたり、スマホを見せていればこの時間は静かで自分たちの用事ができるというような実態を見ることもあるため、家庭における読み聞かせの充実ということも入れ込んでいけたらという話があったので、保育園でも保護者の方に、こんな本を子どもたちが喜んでいるということ発信していけたらいいと思う。
- 委員：ネウボラ推進課の建物に入るとホールがあるが、そこに職員から子どもの読み聞かせにおすすめの本コーナーがある。ネウボラ推進課は母子保健の担当になるので、関わってくるのは乳幼児のお父さんお母さん。その部分で何かできることがあるのかということ、保健師たちとも話し合っていきたい。
- 委員：教育総務課としては、第四次北杜市子ども読書活動推進計画が令和7年度からスタートということで、できるだけ早く司書部会など先生方が集まる会議でこのような計画があることを周知し、教育総務課として支援できることはしていきたいと考えている。
- 委員：それぞれの立場で、第三次よりもさらに一歩進み、また時代を反映したものになればいいと改めて思う。計画はあくまでも計画だが、文章だけでどれくらい浸透するのかということも含め、アクションプランに繋がるように、一目見て学校ではこうしよう、家庭ではこんなことができる、市立図書館ではこういうことができるというような形で、みんなが考えられるものに繋がるといいと思う。
- 議長：働き方改革の観点で、司書の負担等の懸念の声もあったが、人材育成のための研修のシステムも考えていくことが必要なのではないか。また、既に早川町や山梨市では、1人1台端末から電子書籍読みたい放題、つまり公共図書館や学校図書館にいつでもアクセスができるというようなシステムが導入されている。けれども、今の読書活動も、ただ電子書籍を読むだけでなく、そこから協働的な活動に進めるような電子書籍の作りも、ある会社では発行している。そういう環境についてもこの5年間で大きく変化すると思うので、常に子どもたちに最適な環境を整えるようなデジタル環境についても考えていただきたい。
- 学校を預かっている時に感じたのは、やはり外国籍の子どもたちは、結局日本語が不自由な関係で SNS やゲームにはまっていってしまう。その子たちに良質な本に出会わせるような機会が欲しいが、それはどこなのか。例えば、外国人の子供たち、預かっているのは行政で言えばどこの担当になるのか、その辺と連携していかないと、学校と図書館だけが頑張っても、なかなか手が届かないということは強く感じた。それは障がいを持っている子

どもについても同じで、障害福祉に関するところと連携しながら、必要な本を適切なところで提供できるような連携も行政との中では必要だと感じている。

今、県の中で大きな動きとしては、行政と図書館と民間の書店が一緒に活動している山梨読書活動推進事業がある。そこには大学生等の読書活動クラブも入って、様々な読書イベントを行っている。その中の1つにビブリオバトルなどもあるが、書店や出版文化がなくなっていくことも子どもたちの未来にとっては非常に危惧されるべきこと。本来であればこの会議に書店の代表が入っても良いのではないかと感じている。本を贈り合うシステムとして、古本も行き届かない子どもたちにその本を届ける、ファーストブックだけではなくセカンドブック、サードブックとしても読んだ本でもいいので贈り合う、様々な施設に常に本が置いてある、そこに居場所がある、このような仕組みを民間と協力してできないか、またはクラウドファンディングなどのシステムを使いながら、本を置く環境を作ることができないか。子どもの読書活動の中に、本を送っていくシステムを考えていくことができたら素晴らしいと思っている。ただ、これが具体的に計画の中にどう書き込めるかというところはまだ曖昧なところがあり、1つの理想として話をさせていただいた。予算に限度がある中で、新たに購入する、新たにお金をかけていくことだけでなく、今ある資源をバトンタッチしていくという考え方があっても良いのかと思う。

他に気付いた点については、事務局にメール等で連絡し、反映していただきたい。

議事（2）その他

委員、事務局ともになし。

閉会